

その気配に気が付いたのか、はるの頭が何かを探そうとするようにもぞもぞと動き出す。

その顔を見れば何かが起こる気がして、俺は大胆に歩き出しながら投げ捨てるように言った。

「明日の列車も早いのだ。寝てしまいう前に片づけをしておけ」

「……え……？」

まさか返事があるとは思わず、俺はつい振り返ってしまった。

一瞬遅れて顔を上げたはるは、まだ半分眠そうに臉を震わせている。

だが視線だけは迷わず俺に当てられていた。

「明日……早いんですか……？」

眠た気に舌足らずなその声は、どこか甘い響きで。一瞬過ぎたそんな感覚を打ち消すように、俺は殊更強い口調で言った。

「そうだ。八時にはここを出ねばならん」

「……そう、なんですか……」

と、はるは再び頭を垂れる。その頼りなく萎れた姿に、俺は押さえきれない苛立ちが沸き上がった。

そんな姿を、何故俺に見せるのだ。はる！

「……一体何なのだ、貴様は。言いたことがあるならはつきり言わんか！」

仮にも義理の姉となった女に、俺は取り繕うことも出来ずに苛立ちをぶつける。

だがそんな俺には慣れていると言わんばかりに、はるは怯むことなく俺を見上げた。

「……じゃあ言います。……私、観光がしたいんです」

「か、観光……だと？」

思いもよらぬ返答に呆気に取られた俺を見つめたまま、こくりとはるは頷く。

「だってせっかく京都まで来たんですよ？何も京都らしいところを見られないなんてもったいなすぎると思いますか？勇様」

何を子供じみたことを、と思ったが、はるの眼差しは真剣そのもので、むしろ俺の方が間違っているのではないかと思わせる妙な勢いがあった。

「京都など、いつでも来られるではないか」

「男の方はそうかもしれないけど、女はそうもいかないんです！」

やけにきつぱりと言いつ切るはるは一步も引きそうにない。

……確かに男の留守を守ることが女の役目であることを考えれば、宮ノ杜家主の正妻であるはるは家を守ることに最も重要な役目である。そうそう家を